

平成26年度学校評価(年間評価)

学校名 壺学校
---------

前年度評価結果の概要	重点目標(1)については、家庭で読書・学習時間が増えたと答えた保護者は61%。重点目標(2)については、防災避難訓練等はすべて実施した。重点目標(3)については、専門性が向上した答えた教職員91%となっており、全体を通しておおむね目標は達成されたと思われる。次年度は、保護者・県民から信頼される壺学校の構築を重要課題として、重点目標は、妥当性・具体性のある個別の指導計画に基づいた実践、聴覚障がい教育のセンター的機能の強化、就学指導の実績の継承と進学指導の実績をつくるの3点とする。
------------	---

学校教育目標	中期目標	重点目標
聴覚に障がいのある幼児児童生徒に対して、一人一人の実態に即し、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に準ずる教育を行うとともに、各学部間の連携により一貫した教育を行い、障がいによる学習面、生活面の困難を主体的に改善・克服し、社会参加・自立に必要な知識、技能、態度及び習慣を養う。	(1)幼児児童生徒の生活年齢・発達段階に即した主体的な活動を促すとともに、基礎的・基本的な知識・技能・態度及び習慣の獲得を図る。(2)幼児児童生徒が、場や相手など状況に応じたコミュニケーションができるようにする。(3)各学部間、寄宿舎、保護者との連携を強化し、幼稚部、小学部、中学部、高等部・専攻科を通した一貫教育を推進する。(4)安全で過ごしやすい教育環境の整備・改善に努める。(5)小学校等からの支援要請に的確に対応し、聴覚に障がいのある本校以外の幼児児童生徒に適切な支援を行う。	(1)妥当性・具体性のある個別の指導計画に基づいた指導を実践する。 (2)関係機関との連携を深化させ、聴覚障がい教育のセンター的機能を強化する。 (3)就職指導の実績を継承するとともに、進学指導の実績をつくる。(キャリア教育)

重点目標	達成(成果)指標	重点的取組	取組指標	PL SL	自己評価結果		次年度の改善策	学校関係者評価			
					評価	分析・考察					
(1)妥当性・具体性のある個別の指導計画に基づいた指導を実践する。	教員の自己評価で個別の指導計画に基づいて指導することで、幼児児童生徒の能力を向上させることができたと答える割合を80%以上、個別の教育支援計画については、保護者アンケートで保護者の思いが受け止められた計画になっていたと答える割合を80%以上にする。	連絡シートを活用して、語彙を増やす。【幼稚部】	連絡シートから幼児の語彙状況を把握し、個別の指導計画に生かす。【幼稚部】	PL麻生靖代	3	3	連絡シートを活用することで、家庭でのやりとりの様子がわかった。また、やりとりの方法や、お子さんとの関わり方を記入することで、保護者の関わり方が、変わってきた。表出面での指導に力を入れる。	今後も引き続き、指導をしていくとともに、個人のみではなく、友だちとのやりとりの中で、語彙を育て合う環境を作る取り組みをしていきたい。	不安な点、気にかかることを相談するとすぐに、回答、実行をしてくれている。		
		図書館や学部(学級)文庫の活用【小学部】	読書タイムの設定、図書館の定期的利用をすることで読書習慣を身につけさせる。【小学部】	PL小倉逸朗			学部一斉に取り組む「読書タイム」を学期に1週間ずつ設けた。「読書感想カード」等を意欲的に書いていた。各クラスとも図書館や学部の読書コーナーの利用を奨励したので、読書量も増えてきた。また、公共図書館(ホルトホール)の利用の仕方を学んだクラスもあった。			今後も同様の指導を続けるとともに、大分県学校図書館協議会編「たのしい読書」の内容を活用した取組をしていきたい。各学部文庫に新しい本を入れる。	学級文庫等について長い間読まれていない本が見受けられる。本の入れ替え度を高めることが望まれる。
		学力向上のために朝自習でドリル学習に取り組む。【中学部】	朝自習の時間など短い時間を有効に活用して自学する習慣を身につけ、基礎学力を向上させる。【中学部】	PL五十嵐義弘			一度行った課題は時間を空けて再度行い、生徒一人一人の学習定着度を確認した。ほとんどの生徒については、一回目よりも二回目の方が正答率が上がっている。定着が厳しいと思われる生徒については、個別に同じ課題を繰り返し行い、定着を図っている。			今後も学習内容が定着するよう、毎日継続してドリル学習を行い、定着度を確認していく。	苦手で分らなかったのが分かるという気持ちになったり、もっと分かってほしいという意欲につながった。
(2)関係機関との連携を深化させ、聴覚障がい教育のセンター的機能を強化する。	乳幼児相談来訪者アンケートで、相談が子育ての役に立ったと答える割合を80%以上にする。	通級生の在籍校の児童生徒、又は教職員を対象に、きこえについての啓発授業や研修を行う。【教育相談】	各担当が訪問校の課題、あるいは聴覚障がいについて講義を行うことで、聴覚障がいに関する理解を深める。【教育相談】	PL加藤俊一	3	3	理解啓発授業は、1学期に小学校7校(児童対象)、夏休みに小学校4校(教職員対象)、2学期に小学校1校(児童対象)、別府市特別支援学級担当者研修会にて、それぞれ実施することができた。	理解啓発授業を行うには、補聴器等いろいろな道具が必要である。音を遮断するヘッドフォン等、まだ不足しているものがあるので、今年度内に準備し、新学期からすぐに使えるようにしたい。今後は、本校の保護者にもPTAの会議等で取り組みの状況を報告したり、HPを活用して情報発信する。	学校外での取組について知らない事が多い。もっと積極的に周知に取り組む必要がある。		
		医療機関・療育機関・保健所・保育園を訪問し、乳幼相や教育相談の広報活動を行う。【乳幼相】	新しいパンフレットを作成。関係機関20カ所以上に持参し、直接配布・説明することで連携を深める。【乳幼相】	PL後藤由美			担当者に直接説明して、渡したことで、つながりができ、担当者からの相談の連絡があったり、紹介されて実際に保護者が相談に来たり、と配布した成果はあった。しかし、担当者からの連絡で、きこえに困っているお子さんがいることは把握できたが、本校に相談に来るまでには至っていません。相談に来たときには、年齢が幼稚部段階まで上がっていたりするケースが4件あった。できるだけ早期からの支援につながるよう、今後も継続して広報活動が必要である。	県立病院、大分大学医学部病院、別府発達医療センター、大分市保健所等に、パンフレットを持参し、年齢が上がってから本校に相談に来ている等の例を出して早期からの支援の必要性を説明するとともに、保育内容や相談の方法等を見直す。	プールサイドに新設された乳幼児相談の案内版は目立って良い。パンフレット配布後の効果について検討が必要。		
(3)就職指導の実績を継承するとともに、進学指導の実績をつくる。(キャリア教育)	卒業生の進学・就職100%を達成する。	全員で筆談力向上の指導を行う。【高等部】	卒業後の生活場面を想定し、具体的な状況に応じた筆談の練習を週1回以上実施する。【高等部】	PL横山万里子	3	3	クラス担任を中心に、自立・帯自立・HR・総合的な学習の時間、また各教科の授業で筆談の機会を設けた。筆談に関するアンケートでは生徒職員共にその必要性を再確認できた。筆談の取り組みをさらに充実させるために、朝読書時に『新聞記事書き写し』に取り組ませ、『情報の泉』の刷新で生徒の興味関心を広げる取り組みを行った。『新聞記事書き写し』と意味調べ』は職員で分担して、個々に丁寧な指導を実施、生徒も真面目に取り組んだ。	地道な筆談指導は今後も継続する。筆談の習慣をつけることに加え、来年度はさらに筆談内容の充実にも取り組んでいきたい。生徒への情報提供も含め、筆談力向上のさらなるステップとして、年度途中から始めた『情報の泉』と『新聞書き写し』であるが、今後も継続していく予定である。生徒の反応を見ながら学部でアイデアを出し合い、必要な部分は改善・工夫していきたい。	少しずつ筆談の力がついている。		
		1年目の離職者を出さない為、外部機関と連携し個別移行支援計画に基づいた巡回指導を行う。【進路指導】	卒業生の進路先に対し企業訪問を年1回以上実施し、状況把握と支援、併せて求人開拓をする。【進路指導】	PL黒川黄実子			6社中、移行支援のための訪問を6社、計8回実施。訪問とは別に、担当者や卒業生・保護者にそれぞれ連絡を取り、状況把握に努めている。また、卒業生の来校による相談やハローワーク等との情報交換も継続中。新規に実習先と求人を得ることができた。	「卒業生の声」を在校生に届ける企画をすることで、卒業生にも仕事に頑張ってもらい、在校生にも、将来と現在のそれぞれに対する目的意識を明確にさせたい。11月の会社見学時に、卒業生2名と高1・2年生との懇談を実施。1月に中学部で卒業生講話を実施する。	企業の姿勢、受入体制、ニーズを把握し、連携する必要がある。また、定着を図るための関係作りも必要。		
		幼小中高の一貫教育の実現を目指し、各学部間での連絡会や各教科での連絡会を提案する。【教務】	年間2回、各学部間及び各教科毎の連絡会を実施することで、一人一人に合わせた学習指導・生活指導を系統的に行う。【教務】	PL後藤昭彦			幼小・小中・中高の各学部間で個々の子どもの学習・生活指導等の引継ぎを実施した。この会で得た情報を活用して、前年度の取り組みからの関連性や継続性を考慮した個別の指導計画等を作成した。中高の5教科教員が教科別に集まり、入学者選考や教科指導に関する意見交換会を実施した。互いに日々の教科指導の方法や工夫、悩みなどを出しあい、自らの授業改善に役立てるための情報を得た。また、校内で実施される互見授業や研究授業に学部を越えて参加し、事後研等で指導方法についての情報を共有した。平成27年度教育課程編成委員会では、他学部の教育活動の内容と特性を理解するとともに、学部間での指導内容や方法の一貫性を重視した教育課程となるよう議論を重ねて来年度の教育課程を作り上げた。	学部間で伝えたい情報や得たい情報を文書で伝えるための、引継事項記入用紙の様式を確認し、必要に応じて見直しを行う。  中高教科別意見交換会を毎年定期的にも実施するべく、教務部で適切な実施時期や回数を検討する。他の学部間での意見交換会の実施も検討する。  互見授業や研究授業に学部を越えての参加がさらにしやすくなるよう、行事や校時等の調整をする。	学部間の一貫した指導体制は理解できたが、物足りない。		

総合評価 次年度への展望等	重点目標(1)については、指標としていた幼児児童生徒の能力を向上させることができたと答えた教員の割合は95%であった。ただし日本語能力の向上については十分指導できていないことからさらなる言語活動の充実が望まれる。また、同じく重点目標(1)に掲げた指標、個別の教育支援計画で保護者の思いが受け止められたと答えた保護者は89%。重点目標(2)については、乳幼児相談来訪者アンケートで子育ての役に立ったと答えた相談者100%。重点目標(3)については、卒業生の進学・就職率100%。とおおむね指標を達成できた。
------------------	--